

手術室におけるアナフィラキシー： 周産期を含めた最新の知見と対策

座長

吉田 健史 先生

大阪大学大学院医学系研究科
麻酔・集中治療医学教室 教授

演者

高澤 知規 先生

富山大学学術研究医学系
麻酔科学講座 教授

日時

2026年2月15日（日）

11:55 ~ 12:55

会場

第1会場

岡山コンベンションセンター 3F
「コンベンションホール西」
〒700-0024 岡山県岡山市北区駅元町14

- 本セミナーは整理券制ではございません。
- 現地開催のみ。



手術室におけるアナフィラキシー：周産期を含めた最新の知見と対策

手術室内で発生するアナフィラキシーは、稀ではあるが致命的となり得る重篤な有害事象である。主な原因は、筋弛緩薬やその拮抗薬、抗菌薬、消毒薬などである。周産期においては、これらに加えてオキシトシン、局所麻酔薬など多様な薬剤が関与し得る。妊娠に伴う循環血液量の増加、末梢血管拡張、胎児・胎盤循環の存在など、妊娠期特有の生理的変化があるため、発症時には母体のみならず胎児の酸素化にも重大な影響を及ぼす可能性がある。そのため、周産期アナフィラキシーの管理には、一般症例以上に迅速かつ的確な診断・治療判断が求められる。

日本麻酔科学会では2021年に「アナフィラキシーに対する対応プラクティカルガイド」を策定し、診断、治療、再発予防の標準化を推進している。また、日本で進行中の全国疫学研究（JESPA研究）により、原因薬剤の傾向、発症時の臨床像、アドレナリンの投与率などの実態が明らかになりつつある。

本講演では、アナフィラキシーの発生機序、診断アルゴリズム、治療戦略を概説するとともに、周産期特有のリスク因子と対応の要点を整理する。さらに、実際の症例を交えながら、母体と胎児双方の安全を確保するための管理戦略を紹介する。加えて、多職種連携の重要性を踏まえ、麻酔科・産科・新生児科・看護スタッフが共通認識をもって行動できる体制構築の必要性を強調する。

アナフィラキシーの原因薬剤同定のゴールドスタンダードは皮膚テストである。しかし妊婦では皮膚テストの実施が制限されることも多く、好塩基球活性化試験や特異的IgE抗体価測定などのin vitro検査が安全かつ有用な診断手段となる点についても言及する。

高澤 知規（富山大学医学部麻酔科学講座）

